

第 50 回全国学校体育研究大会長野大会 第 1 回プレ大会 講演会記録

期日 2010.11.25

会場 長野市立加茂小学校

テーマ 「第 50 回全国学校体育研究大会長野大会に向けた研究の方向性について」

筑波大学大学院 人間総合科学研究所 教授 岡出 美則先生

【講師紹介】

岡出先生は、体育科教育学を専攻され、学生を指導する傍ら研究を深めていらっしゃいます。日本学校体育研究連合会の常務理事をお勤めになられ、全国学校体育研究大会長野大会の開催に向けて、研究面でもたくさんのご指導をいただいています。先生は、ドイツのスポーツ課のカリキュラム構成を中心に、体育をめぐる国際的な学力解釈の動向についての研究を深められていると共に、大学における外国教師教育のプログラム開発や保健体育の授業づくりの研究に取り組んでおります。特に、保健体育の授業づくりにかかわっては、戦術を中心に据えた球技の授業づくりや良好な仲間関係づくりを意図した授業づくりについて、そして、体育理論の授業づくりについても研究され、今回改定されました新学習指導要領解説の保健体育編の作成にもかかわられております。本日も長野大会に向けた研究の方向について研究面にかかわるご示唆をいただけるものと思います。どうかご清聴のほどよろしくお願ひします。

【ご講演】

長野大会では、学体連の担当理事ということでサポートさせていただく立場にいる者ということになります。長野で大会を受けていただくにあたり、来年に向けて準備を進めていただいているということで、今回私の方にいただきましたリクエストは、長野大会に向けてできるだけ情報を提供するという事です。お手元の資料で進めさせていただきたいと思ひます。

学校体育研究大会の位置づけ

今日、80分程度時間いただいてありますので、5つくらいお話をさせていただきたいと思ひます。まず、この学校体育研究会の実現がどういうものであるのかということと、来年度から小学校体育に関しては完全実施に入っていくので、どのようなことが求められているか。それから、実際に授業される際には先生方の価値観や経験がかなり授業の実態を方向付けていくこととなりますので、実際授業をしていくにどのような授業成果を仮定しているのかを若干ご紹介したいと思ひています。その上で、先生方が授業の改善に向けてどのような知識を共有していけるようになるのか、そこについてのアイデアをご紹介できればと思ひます。

まず、学校体育研究大会の実現ということで、これは文科省のホームページからとってきたのですが、実際に教員が育っていくプロセスの所には、まず養成の段階があって、採用されて、それから採用されながら研修をうけて、なおかつ、人事の管理をしながら教員を育てていくシステムが動いているわけです。この教員養成の段階も急速にシステムが変わり出していますし、この現職の方々の研修制度も、免許更新制等が入ってかなりシステムが変わり始めている。そういう段階にあるわけです。今、最初にご紹介したように、私たちが授業する時、自分たちが受けてきた経験というのは強烈にきき、逆に言うと、自分の経験を超えて授業をできる人たちは少ない。これは普通、大学生で言うと、自分が受けてきた経験しかなくて、人がやっている授業を見る機会がないまま大学では養成の段階に入ってくるということになると思ひます。それから、先生方はこのような機会がなければ通常授業していると人の授業を見る機会はずりないですね。自分の授業をやることで時間をとられるので、人の授業を見ながらどういうやり方があるのかというアイデアを集めるのはなかなか難しいのが現状だろうと思ひます。その

中で、文科省が今体育の授業の改善に向けて行っている事業が大きく三つある。一つは指導主事の方たちを集めて指導主事の方たちのトレーニングを行う。これは、かつて菅平で毎年九月に行われていたのですが、教員研修センターの方に移って、全国の指導主事さんを集めて体育授業を運営するに当たってはこういうことをやってほしいと研修をしている。二つ目の柱は、文科省の事業から切り離されて、教員研修センターの方の事業として行われている伝達講習会です。各都道府県から指導に的立場にある人達に集まっていただいて、授業のやり方等について研修し、各都道府県でその情報を広めていくやり方が二つ目の柱です。いずれのやり方をとっても、生で授業を見て研修を進めていくというシステムはとれていない。で、三つ目の柱になるのがこの学校体育研究大会です。福岡では14校で公開の授業が行われ、それが幼稚園から高校まで一気に開催され実際にその授業見ながらいろんな情報交換ができる機会になる。そういうものとしてこの大会が位置づいているということになります。

このような大会をなぜしていくのかということは、基本的には教員の方達が良い授業を実現していくための研修の機会、あるいはそれをより良いものとして多くの人たちが共有できるような機会を提供していくことです。私たちが考えてみたいのは、「授業というのは誰のためにしているのか」ということが、まず根本の問いかけになると思うのです。教員というのは、免許状を持っている方と普通考えていただきますと、教員として実際に働いている方以外に、ものすごい数の人たちがいるわけです。小学校より中学校・高校の方が、働いている方達より免許持っている方達の方が圧倒的に多い。ところが、じゃあ、免許の方を持っているからちゃんと授業できますか？という話になると、そうではないです。トレーニングを受けながら教員として育っていくので、専門職としてのステイタスを築けるのは、やっぱり、そこがあるからやっていけるはずなのです。授業していく専門職としての自分たちのステイタスをちゃんとキープしていくのは、授業を受ける人たちにとって「受けて良かったな」と思える。授業やった人たちにとっては、やって「今日満足できたよね」と思える。これは、父兄にとっても良かったと思える。学校にとっても地域からの信頼を得られる。それから、地域とか国はそのために資本投下を当然しているわけです。福岡の大会では、特別公演は王貞治さんがやられました。彼が講演の端々に「教員にもっとお金をかけたらいいんじゃないか」ということを言っておられる。それは、この二十世紀...二十一世紀は教育の時代だと言われた方たちもいますけど、やはり、そこにお金をかけて人を育てていくことが、いろいろ人材を育てていう上でもすごく大事な事なんだ、そういう認識を持っておられるところがかなりあるわけです。この中で、授業している人が「どうも満足できない」と言うのはまずくて、先生だけで満足しててもこれだけでは困るわけです。受けたお子さんが良かったとか、親御さんが良かったって言ってくださるような関係をどう作っていくのかを私たちは考えないといけないなと思っています。

この中で、私は常に出すのですが、授業が楽しくないとダメなことは皆さん言われます。でも、「楽しいだけでいいのですか？」と言われると、「いや、楽しいだけではダメなんです」と必ず言われる方がいる。でも、ここで見ていただいてわかるように、板倉さんは仮説実験授業の提唱者です。この方自身が楽しい授業に関しては、多分一番最初に「これだけで良い」と言われた方だと思います。この仮説実験授業の方たちが作られたアイディアは、いわゆる理科とか算数とか社会の教科書とかに必ずネタとか入っています。僕自身も実際に一番スタートは小学校の教員だったのですが、理科の授業をやった時にうまくいかない、なぜだという話になった時に、やっぱり授業の手続きがあって、それを踏まないのだめだということは同僚の方たちに教えていただいた。そういうネタはその人たちが作ってきたのがほとんどです。この人はどういう言い方をしたかということ、「授業は楽しくなければだめだ」と言い切っているわけです。ところが、現状の所は「授業は楽しくないとだめですよ」と言うが、なかなか言えない。ところが、こういうタイプもある。「我慢すりゃいい」これは、よくあるのですが、嫌でもそこにいて人に迷惑をかけなければ時間が過ぎるから、とりあえず我慢しとけよ...そういう感覚で授業を受けるっていう...これは多分ありえる話です。これに対して人に優越感を感じる。授業をすると先生が褒めてくれて、俺はあいつよりえらいぞとか、あいつよりなんかできるぞっていうようなことを思わせてくれる

場所が授業の場だと言われる方もいます。ここら辺ぐらいまでは、かわいいというか、授業を受けている人たちにとってあんまり被害ないですけど、この4つ目ですね。これはどういうところで起きたかっていうと、大学の進学率がどんどん高まって、今の場合は逆にいうと、大学全入時代となっていてプレッシャーが少なくなっていますが、大学入学定員が少なく、受ける人たちが増えていると何が起こるかっていうと、ちょっとしたミスが基本的には致命傷になって入学できなくなる。この優越感を感じる時ってというのは、失敗をしてもトライアルして行って結果が出てくればまだ上に登っていける可能性あるのですが、この落ちこぼれるとはどういうことかという、自分がミスするとそこに残れなくなるので挑戦しなくなるんですよ。基本的には守りの体制に入ってしまう。この状態でずっと授業を受け続けるのはなかなか辛いですよ。自分が伸びたとか賢くなったって思えない。そういう意味では授業を楽しいものにしていこうとすると、どんなことが必要だということ自体を板倉さん達は言っていたわけです。この板倉さんは、実は仮説実験授業というのは、基本的に7割～8割のお子さんたちがちゃんとある結果を出せるようにしていかないとダメだと言っていたわけです。それはなぜかという、仮説実験授業が一番単純な言い方をすると、最初に二択の問題をぼんぼんと当てる。「どっちが正しいかあげてみる」と言われると子どもさんたちは「こっちだ!」「あっちだ!」というわけです。「どっちが正しいか論拠立ててやってみる」ともう一回ディスカッションさせるわけです。そうしていくと、意外に賢い子とかがエラーを起こすのですが、「結論は実験で出しましょう」という形でやるんです。だから、ディスカッションしたことがちゃんと実験でやると白黒つくようなしつらえを考えていた人たちです。そうすると、クラスの中の優等生みたいな子が結構エラー起こして、こいつバカだろうと思っている子がやっぱり正論を言うてくるんです。その中で、「いや俺、やっぱり自分一人じゃ、こういう答えたどり着かなかったけど、あいつがいるから俺たち正答にたどり着けたんじゃないか」とか、「人間ってこんなすごいことをずっと考えてきたのか」ってことを授業の中で実感していけるが、この人たちが提唱していたことです。なので、ここに書いてあるように人間観の変容を促すっていうのは「あいつがいたから」「人間ってすごい」っていうこと自体を授業の中で実感させていってあげることができる。そういう中で、「ああ、自分たちで学習することが大事なんだ」と思えるようにしてあげていくことです。このしつらえを授業の中で実現していくこと自体が大事だと言ったのが板倉さん達なので、このところで「授業は楽しいものじゃないとダメだ」と言ったわけです。こういう流れの中で、例えば体育の授業っていうのはやっぱり楽しいっていうこと自体をずっと掲げてきたわけですよ。1977年の学習指導要領の所から楽しい体育と言うようなキャッチフレーズができて、その中で何を持っていて楽しさだということについては、皆さんいろいろ論議をされてきている。この学体研の大会自体で、2007年から2011年までの大会テーマをお出ししましたがけれども、これが、この2006年の所から文科省が主催のところにもう一度戻った年ですね。そこからこの間、学習指導要領の改訂の作業の中で、なおかつ実施をするまでの間に各都道府県であげられていく全体（研究発表校テーマ）と言うのがこのようなものがあったということです。

先ほどもお話があったように、学力という言葉、体育的学力という言葉を入れてきたわけです。知識と技能だとか、基礎を培うだとか、こういうような言葉が必ず出てくるようになりました。文科筋には文科筋の言葉があって、例えばなんで体育的っていう言葉をわざわざつけたんですかという話になると、これは生きる力の中での学力規定というのがある。それは体育の所でそのままやっていたのかって話になるわけです。生きる力の中には健康体力うんぬん全部入ってきています。でも、ここで考えているものは、それに限定されない話も必ず出るわけです。そういう言葉の摺合せも多少難しいのですが、少なくとも体育の授業では先生たちにちゃんと指導していただきたい内容はあるし、そのことをちゃんと子供さんたちが身に付けるような授業の実現をやっていただきたいっていうのは、国としてのリクエストです。国はあくまでその外枠を保障するということなので、実際の授業の実施自体は学校さん、あるいは個々の先生方です。そこを拘束するわけではなく、できるだけいい授業を実現していただくための条件提示を行政のサイドはやっているということになります。この中で各都道府県の所がいろんなテーマ

を学校に設定していただいて各々の学校がずっと3年なりの時間をかけて授業を展開されてきたというのがこの間の経過です。鳥根の大会があり、福岡の大会がありとすることでだいたい一つの開催県の所で11～12ぐらいの学校が一斉にやられるので、幼稚園から特別支援学校、高校も入り、小学校中学校も全部入るといった形の大会が現状開かれているということになります。このような動きの中で、長野大会につきましては来年度、これだけの学校で実際に授業をしていただくということです。全体のテーマに各学校さんの方も、リンクしていただきながらディスカスできることが一番来られる方たちにとっては望ましいという形になってきます。

学習指導要領実施の中で求められる対応

この中で、学習指導要領実施が来年から小学校です。一番確認しておかなければならないのは、『運動に親しむ資質能力』というふうに言われるもの...福岡大会での言葉で言えば『体育的学力』という言い方。ここのところで挙げられているのは運動への関心や自ら運動する意欲とか、仲間と運動することとか工夫したり云々とか。それから技能、この4つの柱が立っているということです。だから、授業の所で期待しているのは技能だけ高めなさいと言っているわけでもないし、それから友達と仲良くできればいいって、それだけでいいと言っているわけでもないし、意欲関心だけが高まればいいと言っているわけではない。こういうものをバランスよくいかに育てて行けるのかということと同時に、発達の段階がある。発達の段階と同時に指導する内容も技能の内容、態度の内容、知識・思考・判断...先ほど表現の所でも若干お話しありましたが、技能の内容っていうのは要領上の書き方は楽しくなになにうんぬんって書いてある。要領がこう作られて歴史的に進んできたプロセスを振り返っていくと、技能が前面に出ていた時とか、体力が前面に出ていた時っていうのは、子どもさんたちが楽しいとか云々は横に置いて、とりあえず体力を高めればいいのか、技能だけ高めればいいのかと授業が展開された時期があるという認識が、この当時の教科調査官にはあるのです。楽しさを言ったこと自体の価値はあって、そこにもう一回戻ってしまうようなことはしたくない。だから先ほど話したように、運動に親しむ資質能力っていうのに4つの柱があるとすると、そのところにちゃんとつながるような授業展開を考えると、この指導内容の記述の時には、態度的なものも入れたいというのが教科調査官の思いだったのです。同時に、態度と言われているものも、積極的に取り組む自主的に取り組むだとか仲間と主体的にかかわり合うだとか、役割を持ってちゃんと一生懸命にかかわっていくだとか、健康安全にかかわるだとか、それから、小学校ではこれは表に出ていませんけども、解説書等見ていただくと、実質的には思考判断の下の所に「～について知り」と書いてあるんですね。見ていただくと、本当にその「～について知り」というのがそのまま出ています。なぜ小学校でこの知識を大事な記述のところの表記に入れてないか、これはやっぱり教科調査官の方のその当時の思いがあって、ここを知識・思考・判断にすると、ここがかなり前面におし出たような授業になっていくリスクを負うことになるので、それは避けたい。だから、「とにかくわかればいいでしょ」みたいな形でやられてしまうとそれは授業としては大変バランスの欠いたものになってしまうリスクを負う。それを避けたいというようなことがあって、小学校の所は思考・判断という書き方にしたのが現状なんです。こういう中で、今回小学校から高校までの間を4年ずつの3ブロックに分けるということをやっていますよね。これも、小学校は小学校、特に小学校の低学年から中学年くらいまでに、少しゆったりした大きな枠組みの中で育ててあげたい能力と、中学校2年生くらいまでのものと、それから、高校までの能力ってやっぱりあります。それは識別したい。例えば体力の向上を図る運動であげてみますと、高校卒業時の能力として、どんなのが上がっているかということ、目的に適した計画を自己の体力を高める、計画立てて取り組めるようにしてほしいとか、体力の高め方をちゃんと理解できるようにしてほしいというのがリクエストです。そうすると、体育理論というようなものの中には、スポーツが心身の発達に及ぼす効果とか、こういうものが入っているので、「これを中学校以降教えてほしいです」となりますし、体力を高める運動は小学校部門・中学校部門・高校部門に分けてくる。同時に体力を高めるっていうのは、体力が高まる体育っていうのを期待していま

すよということを言っているわけです。これは、一つの所だけで体力が高まるというふうに考えているわけではないことですし、体力を高めるためには一定の知識だとか、そういうものを身に付けていかないとなかなかそこにたどり着けない認識はあるわけです。こういうことを考えていくと、実際にはこの要領の実施等に向けては授業の質は必ず問われると思います。評価基準の改訂版も国研から出ました。11月15日づけで国立教育政策研究所のホームページから入っていただくと、小学校の評価基準の改訂版というのが出ている。実際には中学校・高校のものも作業を進めていくのでそのうち出てくるはずですが、ここで何を言っているかっていうと、説明責任だけ言っているわけではなく、結果責任という言葉もちゃんとたっている。結局、何を教えますか、指導してくれますかということは要領等で書かれている、あるいは、してほしいことが書かれている。でも、それはちゃんと結果を伴うものかどうか。結果は伴わないとダメだと言っているわけでもないのです。今回の要領の改訂過程の中で、私がたまたま関わらせていただいたわけですが、現実的には現行の学習指導要領が動いた3年目の所から改訂の作業は始まっています。なんで3年目かということ、中学校が終わるのと一緒なんです。完全実施になって、少なくとも新しい中学校の要領で3年間やると生徒さんたちが何がどこまでできるようになったかということが一応見える。そうすると、これ無理でしょう？ということがいくつか出てくるんです。小学校でいうと、水泳の二種目を中学年でやらずのは、ほとんど通過してないですよって話なんです。一種目だけだったら25m泳げる子どもさん達は多い。平泳ぎとクロールと両方とも泳げますか？という話になると、何%の子どもさん達がそこ通過していますか？がくっと落ちるんですね。中学校で言うと、1年～2年生の通過率がめちゃくちゃ低い。いろんな種目、器械体操とか特にそう。なんでそんな話になるかということ、1年生の時の授業時数が限られていて、90時間に落ちた中で、全部の種目をやった上で2年生に送ろうとすると、一つ一つの単元が細切れになってしまうので、何を教えてもらっているか訳が分からない。これで選べと持っていくこと自体、かなり無理だからこういう結果になっているのではないかと、そういう話になる。そうすると、もうその時点の所で、A4の紙1枚くらいなんですけど、中学校の選択制は2年生からスタートするのはかなり難しいので、1年上に上らせられないか、そうすると単元時数もゆっくりと取れる。こういう話って出てしまうわけです。水泳の今の小学校の所も2つじゃなくて1つだけにした方が、実際子どもさん達はちゃんと通過できるんじゃないか。こういうことって、裏付けを取りながら、それなりに進めているわけです。こういう中で、質を保証しようとすると、やっぱり時間数をキープして何をどの学年で配置するのか考えなきゃだめだ。なおかつ、学び直しと書きましたが、例えば中学校等で言うと105時間にもう一度戻ったとすると、領域数が変わっているわけです。では、その15時間をどういうふうにするかっていう話になると、各々の学年の所で若干前学年の復習するような時間も欲しいという話も出てくるわけです。それから、発達の段階に応じた授業の展開は考えていただきたい。これは、多分一番典型的なのは、中学校の1年生2年生の今回のいろいろな記述の変更です。どういうふうなのが出たかということ、小学校の作成協力者の方から出たのは、中一ギャップってことです。小学校でこんな工夫してできているのに、中学校になると、例えば「正規種目、ルールに基づいて授業をするぞ」と言われたとたんに、ドロップアウトする子たちがいっぱい出てしまう。これは何とかならないのか。もうちょっと子どもさん達の実態に合ったような授業できるような段取りでいけませんか、という話は出たわけです。例えば、球技関係の所で言うと、工夫されたゲーム云々という言葉で授業の仕方をもっと子どもさん達の実態に合わせてくださいという話になったんです。体力の所に関しても先ほど話したように、体づくりの運動領域のところと体力、それから知識の所も体育理論だけで全部処理するわけでもない。運動領域の所でもこういうふうに入力してほしいとはっきり明言しましたし、それに合った書き方に変わってしまったわけです。逆に言うと、体育理論の所は教室でしかできないような事をちゃんと教えてくださいというのが現状です。これに応えられるかということ。同時に、この体力づくりに関してはあの、なぜこんな書き方をさせていたかということ、どこの県も今結構、躍起になり始めてます。子どもさん達の体力が低下しているから体力をいかに上げるのかということをもものすごく言われるようになってきていると思う。ところが、こ

の体力づくりに関しては、やっぱり今までの歴史を振り返ってきて、うまくいっているケースとうまくいっていないケースがあります。それを無視してしまうと、同じ過ちを踏むことになると思う。今、日本の外の所でこういう体力作りっていうことを盛んに言われる人達ってというのは何を気にしているかというと、肥満です。子どもさん達は、どんどん肥満傾向になってきて動かなくなっていて、小児成人病みたいのになっていくと。これは医療費の問題からするととても困る問題なので、いかに子どもさん達が運動したいと思ってくれるようになるのか、で、肥満を抑えるようにするにはどうしたらいいのか、ものすごく気を使っています。これは単純に体力を上げろとやっているわけではない。実際に日本の場合も子どもさん達、特に小学校高学年以降、中学校に入っていた時に、やっている子とやっていない子たちのギャップがめちゃくちゃ大きくなってきている。特に女の子達がなかなか動かなくなっている。これはやっぱりつらいことで、結構伸びしろがある時期に運動やらない子どもさん達...というか、やりたくない子どもさん達を作ってしまうのはかえってまずい話だと。なおかつ、かつて日本のもので問題になったのは、際限のない体力作りって書きましたけども、どこまで行ったら合格ですがが良く分からない。授業で、こういうふうに言われる方がいます。体力テストの点上げたかったら、多分、体力テストを授業の中に持ち込めばいい。多分、体力テストのやり方がわからないから全然体力テストの点が出ないお子さん達っていると思います。昔でいうと、幅跳びのどことかやっていると、走ってきて両足でピッと止まって跳ぶ子とかいたわけだね。一回しか走らないからその距離しか出ない。でも、それは記録としては残っていく。「やり方を教えてあげたらもっといい記録出るのに」...いい記録が出るところは2回くらいやっていて「やり方を教えてからやっています」という話もある。それから、体力づくりの推進指定校で、自分の所の学校で毎年積み上げてきて自分とこの学校の平均値どんどん上がっていく。全県発表しようとしたら、全県の記録が3年目に一気に上がってしまいました。こうすると、自分の学校は上がったのに、全体のレベルが上がったから自分の学校は平均点に達してないと報告をしなければならぬ。これ、つらいですね。やっぱり、どこまでいけばオッケーですかっていうのが見えないところで「体力上げろ」と言われるのは、なかなかつらい話で、なおかつ、「授業でやっている内容と、どこまで体力テストの結果が運動していますか」となると、ここはずれているところもあると認めた上で話をせざるを得ないわけです。同時に、際限がないのは、どこまで行っても達成感がないので、「自分たちはなんかやったぞ」「自分たちはできるようになってきたぞ」と思いにくい。それは逆に言うと、「それを続けていこう」という気持ちにはなかなかならないものなので、結果的に言うと、「もうやりたくない」やっていう子どもさんたちを育ててしまってきた。そういう同じ轍は踏みたくない。今、例えばアメリカの人たちだと、こういうものに関わって作ってるプログラムがある。それはどちらかと言うと有酸素の体力ファクターを上げていくようなものを作っていて、かなり効果があると広まっているのもあるんですけども、そのプログラムなんかでもやっぱり趣旨は楽しいということです。やっていて面白いとか、もっとやりたいとか、そういうことはかなり気にされる。学校の外だと、指標を作ってくる。厚生労働省だと、時間の長さだけでなく運動量とかみあわせたような指標を出してくる。学校の体育の授業で、もう一言だけ付けくわえた方が良くと思う。体育授業でやって、子どもさん達がどのくらいの歩数で動くか。週3回、1回の授業45分、普通やると1500歩とかそんなもんだと思う。今でも大人の人たちが万歩計を付けて歩数を計って、どれくらい目途にしているかと言うと8千とか1万です。これを、体育の授業だけで倍にするのは考えられない。逆に言うと、単純に動いている時間だけを増やしてもなかなか効果は薄い。そういう、バランスの中で子ども達に何が必要なのかを考えていく必要がある。同時にこの事が必要になってくる。いわゆる評価基準という言葉が出てきたときは基本的に相対評価と絶対評価というと主観的絶対評価がある。私が絶対だ、私が基準だという人がいますけど、授業は、やはり授業として達成してほしい中身があるので、その達成状況とかをチェックすることが必要に当然なるわけです。こういうのは何が大事かと言うと、目標に到達しなかった場合、誰が悪いのかという話です。一番嫌なのは、教員として、うちのクラスの成績が悪かった。これ俺の責任かよって言われるのは辛い。自分だってちゃんとやっているのに。これは、教員を査定するための道具

でもないですし、子どもさんを査定するための道具でもない。学力の実態把握というところでは、必要かもしれないですけども、大元は、授業を変えてより良いものにしていくのに何をするのか、そのための手掛かりをみんなが共有できる物差しを作っていくということの方が大事なはずですよ。

こういうふうに考えていくと、いろんな提案が出てくるんですけど、これは、国立教育政策研究所の評価基準作成のための参考資料です。小学校分が今、アプローチされている。そこからとってきただけですが、小学校・中学校・高校も体育の観点は変わってない。全体として出されたものは、変わってくる。何が変わってくると言う、今までだと技能・評価と言っていたところが技能になって、思考・判断ってところが思考・判断・表現という形になってきているんです。でも、体育のところでは表現ってというのはある。思考・判断・表現って言われていた時は、言語で表現できるということ言われているので、身体表現と混在するからややこしい。それはやめてくれよということで、今までの観点評価をそのまま使うと体育はなっている。これは、全体の趣旨です。大事なものは、こういうものを何をベースに作るかということです。要は、学習指導要領の記載事項、今回の学習指導要領というのはかなり具体的に書きこんでしまっていますが、これをベースにして評価基準を作っていく。そうすると、この評価基準の中に盛り込むべき事項というのはどういうことか、ここを手掛かりにして作っていくしかない。これをベースにして具体的な評価基準を設定していくということになります。その時に、いやらしいのは、技能のところ、運動の楽しさや喜びに触れていう、文言は必ず入っているわけですよ。これは技能のところ、落とさないと落ちてしまうので、チェックは必要になってくる。これは、書くだけでは子どもさんの実態にあっているかどうか分からないし、どこまで行くとOKですかというのが分からない。

価値観や経験に拘束される授業の実態

こういう中で、皆さん自身にチェックしていただくにはなかなか面白いサンプルだと思うんです。これ、向山洋一さんが跳び箱の指導法を提案した時に、それでいいのかっていう話があって、これは高橋さんがその当時出したものです。例えば、跳び箱を連結して、その上を手でかいて前に進んでいくとか、このあたりのとこだったら丸椅子置いて手をついてどこまで跳べるかやってみるとか、ここどこかにひっかけてどこまで跳べるかやってみるとか、いくつ手前の線から走ってきて手をついて反対側に跳べるかやってみるとか、段階的な開脚跳びのプログラムっていうのが出された。向山洋一さん自身が出されたのは、こうやって跳び箱の上に乗らせて手をつかせて、ひっかいて、反対側におろせばいいでしょ、それが難しい子どもさんには、先生がフォローしてあげればいいでしょ、この2つでほとんどの子どもさん跳ばせませよと言われてたんです。これを例えば2つ出して「皆さんだったらどちらでやられますか」という話をすると、分かれる可能性がある。昔、僕、愛知教育大学っていうところにいたんで、学生にも書かせていたんですが、面白い。例えば、「向山さんの方がいい」という学生さんがいた。なんでかと言うと、「高橋式は結構面倒くさそう。椅子出すとか、バケツ使ったり、ライン引いたり、面倒くさい。本当に子どもさんはこのようなやり方を望むんでしょうか？まめで献身的な先生には高橋式でやってもらっていいですけど、私にはちょっと無理そう。指導法が簡潔であるというのは、単に手間いらずというわけではない。体育については素人ともいえる教師にとっても、また児童にとって分かりやすいっていうのが重要なポイントです」という風に書くわけですよ。これは自分なりに自分の経験値の中で判断している。ところが、反対の意見の人もいて、「自分は高橋式でやりたいです。」この人にしては向山式でこういうことを重視するというのは良いっていうんですが、例えば、「自分も跳び箱初めて練習をして、跳べるまでの練習方法として向山式で教わり跳べるようになりました。しかし、この方法では跳べない子も中にはいました。だから、これで全部跳べるとは思っていないので、向山式でいいっていうとは言えない。」これ、どちらがいいですかって話になると、当然意見は分かれる。この例は自分たちがどういう指導を受けてきて、どういう成果が得られたかによって指導法を採択する時には、かなりインパクトを受けるということなんです。向山式をダメだっていう人の他の意見でどんなのがあ

るかと言ったら、お尻なんて触れないでしょって言うんです。跳べない子のお尻触って押しますか？男の先生、女の子のお尻触りますか？絶対嫌ですという話が当然ある。高橋式だと、丸椅子置いて危ないでしょ、そんなのできないって絶対に言うんです。傑作なのはこちらの方で、跳び箱の授業ってどういうやり方がいいと言われてたのですが、これも学生さんが書いたものですけれど、「いろんな跳び箱が設定してあって段差があって、『自分の能力に応じたところで跳びなさい』っていう授業をやったときに、先生が今自分の跳んでいる一番下のランクの台にいるときは、跳ばないようにしていた。先生に目を付けられないように」って書くんです。「おとなしくしていたり目を付けられると、しばら他の子を休憩させて、ずっと同じ子が跳ぶことになるから、先生が指導すると、みんなの目が指導されている子に向く。それでもできなくて、できる子たちから笑われるのは嫌だ。とうとう M さん跳びなさいと言う。この一番下のランクの跳び箱は跳んでいます。その上の段の跳び箱は怖くて跳べない。だから一番下のランクでダラダラしている。そういうとき何がでてくるかということ、先生は諦めた子の指導には行ってくれないと思ったけれども、行きそう。で、もう一度やりなさいと言われてた。嫌でたまらなかつたけれども、ノロノロ歩いて、かわいそうなことに早くしなさいと先生が急がせた。跳ぶと何が起こったかということ、変な感じがして、跳び越したんだけれども、左手がジンジン痛くて、先生ができるじゃないって言った。それどころじゃない。左手が痛い。」この子、病院行ったら折れてたんです。これちょっと長いので書かなかったのですが、後の結末の方が面白くて、この子が折れて次の時間から跳ばなくてよくなった。何が起こったかということ、跳べない子が次の時間から跳びだした。同じ目に遭うと、跳ばなくてよくなるから。そうすると、ケガ人ばかり出てきて、跳び箱の授業なくなつたって言うんです。これ、笑い話みたいな話ですけれども、本当にあるのかなと思いましたが、多分全然趣旨が違うんです。この子からすると、跳べるとか跳べないって言うよりもまず怖くてそこに乗って来てない。その子に「このやり方やったら跳べるから、跳べ」って言うても乗ってくれない。これは技術的な観点の問題ではない。こういうところをどうやってクリアしていくかっていうのも、指導法としては大事なはずですが。けれども、だいたい指導法だと「こういう練習するとできますよ」という書き方のものがほとんどなので、できない奴はやる気がないと切ってしまうのです。

授業を規定しているルール

今みたいな現象をみていくと、私たちが授業をやっているときに自分たちの経験値とかをベースにしてやってが、授業はある一定のルールに拘束されている。そのルールをうまく使いこなしている人と、そうではない人たちで、授業の結果がかなり変わると言ってもいい。これも、おもしろい例だと思うのでお話ししますが、例えば中学校で授業やってもらいました。同じ中学校ではないですが、授業の手続きは同じようにやってくださいとお願いした。そうすると、これ3点述べていますが、Aの授業は最初がなくて、ざーと走っていくんです。Bの授業は流れそうで流れなくて這いずり回る。Cの授業は最初低いんですけど、あるとき一気に上がると落ちない。こういう違いがなぜ出てくるのか。手続き的には同じで取り組んでくれと言ったんです。これは、先生の能力が違うからとか云々という話になってしまうと、それは、能力が低いと言われた人たちは、どうすると授業ができるようになるんですかっていう話です。実は、先生の条件とか生徒さんの条件でいくと、何が違うか言うと、Aの授業は生徒さんは2年生、Bの授業は生徒さんは2年生、Cの授業は1年生。A・Bはどちらもバレー。先生はどちらも女性の方でした。どちらもバレー部の顧問でした。それで、Cの授業はソフトテニスで1年生。この人はソフトテニス部の顧問をやっておられる方。その学校での在籍年数で言うと、Cの先生は1年目なんです。子どもさんとの関係は良い悪いで言うと、浅いから悪いということではなくて、1年目でも保っていけるわけです。逆に、この2年目の方からすると同じ学校に5年おられて、なおかつバレー部の顧問で、バレー部の生徒さんも混じっているのに、なんで上がらないんだろう。これはなかなか、不思議な、ある意味、経験年数長い人がうまくできるかというわけでもない。本人たちはこう言っている。Aの授業は、「バレー部はだいたい1/4いて、彼らが上手に振る舞ってくれた。私が何をしたかという

と、積極的に技能だけではなくて、態度面とかや安全面とか、練習方法を自分たちで考えさせて良かったとかできるだけ誉めていきました」Bの先生は、「グループ分けで私は躓きました。グループ間が偏るだけではなくて、グループが機能していないなと思ったんですが、時すでに遅し。もう修復しようがなかった」と言っている。Cの人は、「MVPを入れたんですが、MVPのときにどういう観点で選べばいいのかというので子どもさんたちが大変ばらついていました。ここを合わせていくと、評価がずっと上がっていきました」これは、お互いに見る関係ができていくということだと思います。こういう中で、関係的には仲間作りということの調査票を入れたものですが、例えば集团的達成、あなたのグループは今日やったことが解決できましたかとか、あなたのグループはみんなで成し遂げたという満足感を味わうことができましたかと、こういう項目で10項目を評価してもらっているものです。これは標準化してないですけども、だいたい2.5を超えると、それなりに回っている授業だと我々自身は感じて取っていた。先ほどのBの授業っていうのは2.5を超えない。こういう中で、ああいう現象が起こった。同じようにしてもらったのにこんなにばらつきました。なぜでしょう。多分、学校で同じような手続きを組んでやってくださいと言うと、2001年のラインが3つ、2002年のラインが3つ、同じ学校のものでフラッグとバレー、ダンスと鬼遊び、フラッグ。多少違うのですが、同じような手続きを入れてもらおうと、基本的に最初のばらつきは多くても、10時間ぐらいで、同じぐらいのところにはたどり着く結果にはなる。これは、ルールがある授業のところでちゃんと成果が上がるためには、必ず踏まなくてはならない手続きがあって、それを確実に踏んでいくと、成果に関してはかなり再現性が高いということだと思う。ここを外してしまうと、なかなか結果を得られない。逆に言うと、こういう現象が起こる。今年してもらったんですが、今お話ししたような調査表を使って同じ先生が、同じ学校で違うクラスでやったんです。そうすると、1組・2組総合点、青いライン見ていただきますと、6時間目くらいまでは多少ばらつきが残ってたのが、落ち出すわけです。2組さんの方は多少これより高いですが、最初上り切らなくて落ちたのに、測り直すと上に上り出す。これは、同じ先生が同じ学校の子どもさんたちに対して、手続き的には同じものを入れているんですが、クラスによってギャップが出てしまう。なおかつ、この後半のところの開きが大きくて、なぜ大きいかというと、まだ、この先生と話しながらやっていますが、必ず起きる。それは、子どもさんの実態にある。ある程度安定した手続きがあっても、子どもさんにどのように合わすかを考えておかないと、なかなか結果が出てこない。こういう現象の中で、小学校5年生の子どものさんの跳び箱の授業で5/7時間。このときは、子どもさん1人に先生方1人ずつが張り付いてもらうことができたので、1時間中取ってもらっていた。何を取ってもらったかと言うと、「この一定の時間の中で、子どもが参加していないという人数だけ数えてください」。私たちは、期間記録、GTSというような言い方をしますけれども、時間配分だけで言うと、先生が説明していた時間帯、子どもさんたちが学習ノートに書いていた時間帯、動いていた時間帯、道具の出し入れにかかった時間帯。これ比率的には決して悪い比率ではない。だいたい僕たち、これで言うと、20%以下くらいに抑えてください。10%くらいにしてくださいと言うと、収まってくるんです。ところが、横軸でやらないところがどう出てきているかと言うと、やらない時間帯が出てくる。なぜかと言うと、これは跳び箱の授業で、前半と後半に分かれていて、前半は「自分のできそうなもので、自分で選んでやってごらん」とやった。後半は、「ちょっと自分ができそうもないところを選んでやってごらん」と言った。そうすると、自分ができそうなところでやっている時は、一定の時間が経つとできた気になる。でも次のところまで行ったらダメだと言われるから、「もうやることがない」と言う子どもさんたちが増えてくる。ここのところで、「次をやっていいよ」と言われると、何やろうって話になる。これは先生方からすると、予想してやられる方と、結果的にこうなってしまう方に分かれると思う。私は、こういう現象が起こったらまずいと言いたいのではなく、起こって仕方がないことだと。やっぱり起こる。逆に、こういうことが起こるんだったら、ここで先生方はどう関わられるか。こういう時にやらない子が出てくると、この子たちにどう対応するかを事前に予測して、方針を立てられる。でも、みんながちゃんと言うことを聞いて、最初から最後までやってくれるという感覚でいると、こういう現象が起きる

と、先生が目がきつくなって、なんでこいつやらないんだよってなる。なんでこいつら真面目にやらないんだよって、そういう目で見てしまいます。これ、辛いんです。先ほどの見ていただいた中学校のところで、誉めた先生が最後に「授業中にできるだけ良いところを見つけよう見つけようって思っていた」って言うておられる。見つけると、良いところがいくらでも見えてくるから、先生もネガティブに見なくて安心する。これできる、これできるって任せられるって、先生も余裕もって対応ができる。ネガティブに見ていけば見ていくほど、自分の首を絞める。なおかつ、これ怒っちゃダメと思えば思うほど辛い。こういう現象が発生している。同じようにこの授業のところでも、跳び箱の授業で何回くらいやって、何回くらい成功している。一応ラインはざくっと引けるので、40人弱くらいの子どもさんで見えていくと、成功数が多い子っていうのは、それなりに試行数も多いんです。だから、自信があるので、トライアルもするし、跳べている。自信がない子は、跳ぶ回数自体が減ってしまうということです。こういうところで、授業で初心者の人たちがプログラムを立てるとどういことが起きるかを示しているのがこれで、大学生とかに「自分たちで模擬授業やっごらん」って言うて、面白いくらいに0になる。これは何かと言ったら、授業で話し合いの場面とか、記録書く時間って一切取らない。自分たちで授業の計画立てて、その通りにやっごらんよって言うて、先生が説明したりとか、運動をさせたりとか、道具の出し入れの時間を取るんですよ。でも、生徒さんたちが話し合いをするのが必要だっていう感覚が全然ない。0。こういうルーツだと、授業時間の半分くらいを先生が説明し続けている。1/3話続けている。今日の課題はあれだこれだと続けている。単元の始めでは、こういうことが起こりうると思いますが、6人くらいの先生にこれやるよと言うて、なんでこんなに話しかけるんだとなる。こういうことを指摘した上で、次の時間「時間がかかったら戻すように頭を使ってみるよ」とか、「必ずこのところ少なくとも0じゃないようにしてみるよ」って言うて、そのレベルで変わってしまうことです。でも、多分放っておくとこんな現象だと思います。教育実習生レベルだと、多分このところは超えるのが難しいと思う。では、この子たちにどの程度話しているのってことを数えていくと、これ3人分の合計ですが、強烈ですよ。話しかける回数が、3人で29回しか話しかけなかったグループと、122回も話しかけているグループとある。これは、とりあえず数えてみようってやっている。でも、一応40~60くらいは話しかけられるようにしなよってカウントの仕方もあるんですが、こんなもんです。どこで増えるかと言うて、肯定って言うのは誉め言葉ですが、「いいよ」とかだと誉められる。でも、「やる前に行けよ」とかっていう言葉はなかなか少ない。ネガティブなことは言わない。直し方を具体的に言うてあげるって言うこともそれなりのレベル。でも、学生さんたちのレベルだと、一番最初のところは増えても、なかなか難しいですね。授業のところでも先生方がなぜ誉めないとかダメなのかと言うて、ダンスのところでもありましたが、自分がやっているのがいいのかどうかは、初心者からするとなかなか辛い。こんな動きでいいのかよって。でも、「いいんだよ」って言うてもらうと、できるんですね。それを先生がどうやって見つけられるかっていう話になります。それを見つめようとする、先生が見ている時間が絶対ほしい。自分が見る時間がなくて、これね、これねって回すことで手一杯になってしまうと、いいことを見つけれないので、先生は余裕がなくなってしまう。学生さんたちにこの回数増やせよって言うて、学生さんのレベルで言うて2つくらい問題が起こる。1つは言葉を持っていない。どういう風に誉めて良いか分からないとか、何が良いのか分からないとかそういうレベルで止まる。2つ目の問題は、生徒さんがやっている場面を見る時間を授業計画の流れの中で作ることができない。説明して、「はいやっつけよ」ってずっと見ているのですが、見ているだけで言いに行けないというのは、言う言葉を持っていない。回すことで手一杯なのは、見る余裕がないので、言うことができない。少なくとも、こういう現象はざらに起こっていることだと思う。逆に言うて、ちょっとやろうとすると変えられるレベルの話です。こういうものの中で、改めて、子どもさんたちが授業に飛び込まないと結果が出てこない。どんな子どもさんたちなのかと言うて、だいたい先行経験が乏しい。上の学年に行けば行くほど、多分そうだと思う。それから、何をしたいか分からない。これは今回のデータでいくと、何していいかわからないというのは、大きく2つに分かれる。練習のポイントが分からないっていう子

どもさんたちはいる。技術的な課題が分からない。でも、練習の仕方自体が分からないという子どもさんがいる。先生がこういう練習をしようねって説明しているのに、全然聞いていない。聞いていないから、みんなの前でやろうねって言うと、正確にやらないからエラーばかり起こして、いつまで経ってもできないわけです。でも、練習の仕方は理解しているが、そこで何が大事なのかを分からないのは辛い。これは、うちのスタッフがこの前東京の小学校に行ってきた「こんなことがありました」って言ってくれた例ですが、器械体操の授業だった。子どもさんたちがお互いに教え合うように先生がちゃんと言葉を提供してあげている。例えば、側転やるのに、「手の着き方はこうだよ」と教えている。子どもさん同士は、君の手の着き方は良いとか悪いとかって見ているわけですね。ところが、手を着けたって足が上がってこないの、側転にならない。でも、どうすると足が上がるのかは子ども同士で共有する情報が提供されてないので、「手の着き方はいいよ」って言われても、できないものはできない。それを繰り返してしまうわけです。これは、結果的にあることができればいいということだけを教えるだけではなく、どういう動きをすればいいのかということ自体の情報が欠けているので、動きの修正のしようがないってことです。子どもさんたち同士に教え合いをさせるときには、どういう動きが必要なのか、動きの経過を伝えるような言葉もあるときには必要になってくるはずだと思う。今うちの学生さんにやってもらっていて、割とそれはそうだなと納得しているのが、バレーボールのオーバーハンドパスです。バレーボールのオーバーハンドパスっていうのは中学校でやらせてあげたいと思う。でも、普通はなかなかオーバーハンドパスが不安定なので、だいたい中学校だと部活をしている子をセッターにしてしまって、そいつらに任せれば回るよとやる。でも、それをすると他の子たちはできるようにならない。かと言って、みんなやるよって、どういうモーションをするかということ、多分手の平をこうしてたたき込むんですね。中学校の教科書では、三角形にと書いてある。うちの学生たちにも三角形で教えてもらった？と聞くと、そうだって。じゃあ、この形になるのはどういう瞬間かって言うと、ボールが当たる瞬間？押し出した後？と言うと分からない。だいたいあれは、受ける瞬間か、押し出した後はこうなるはずです。こっちに出て行く。でも、うまい人たちの動きっていうのは引き込む。ボールが来ると引き込んで、コンタクトする瞬間多分こうなっている。でも、このイメージがない人たちは、ここに来たときに三角形にして前にパーンと返してあげる。ボールの勢いが強いとうまくコントロールできないし、下手すると突き指するから痛くて嫌だ。これは、オーバーハンドパスは単純な動きですけども、明らかにどういう動きをしているのかを伝えていないので、よほど経験のある子が賢い子じゃないとそこにたどり着けない。こういう問題は、必ず分かるところについては発生してくる問題ですし、自分ではできる気がしない子はやらない。それから、そういう子どもさんたちはやる回数も少ないので、失敗も大きくなる。もっとかわいそうなのは先生がそういうところを行かない。よく、先生方はできない子のところへ行って言われますけど、最初に行く。でも行って自分が教えてもそいつができないと、いたたまれないので行きたくなくなる。それは子どもさんも一緒に、先生が教えに行ってもできるようにならないから、こんなに一所懸命に教えているのにこいつ何でできるようにならないんだ。そのうちクレームをつけ出すと、俺はこんなに一生懸命やってるのにな。そうなる、あいつのところに行きたくなくな。って話になって、みんな期待しなくなる。これは誰でも陥る。本当は、これの逆のモーションをどのように作っていくか、どういう動きを作っていくかということ自体が授業では問われるはずだと思うんですよ。こういう中で、授業を常にコントロールしている課題システムっていう言い方しますけど、こういうものが授業の成果に影響を与えている。1つは、マネジメント課題と言います。授業の条件を整備するのに、一定のことをやらさないといけなくて、解決しない課題もあるということです。これは、道具の移動とか決まった行動をどういうふうに作っておくかという話です。学習指導は、授業で教える内容に関わって必ず先生たちが子どもさんたちに取り組みせないといけなくて課題もあるということです。3つ目は人間関係に関わる課題です。これも大きくは2つに分かれる。どういうことかと言うと、子どもさんはクラスの中の間人間関係を体育の授業の中にそのまま持ち込んできます。特に小学校の場合はそうだと思う。クラスの中で誰と誰を球技関係だと一緒にチームにするのかっていうのは気を遣われ

と思う。でも、その体育の授業で、あることを学習するのに関係を一定作っていかないと授業が成立しないので、そのところで、人との関わり方について学習させるのはよくある。この3つくらいを意識していただいて、ここからの話に行きたいと思います。

授業改善に求められる専門的知識の共有に向けて

例えば、こういう場面でどう行動するか、いろんな選択肢がある。理由をつけてもらうといいと思うんですが。例えば、跳び箱のできない子どもさんが目についた、それで、その子どもさんにどのように対応しますか。1つ目の選択肢として、無視する。跳べない奴がいても知らん。これは、理由としては、「今日は跳べなくても次の時間になればできるようになるんじゃないか」と思っていると、「今日はわざわざ行かなくてもいいだろう」という判断になるんですね。2つ目はとにかく頑張れと声をかける。3つ目はその場面で直接指導する。補助あるいは技術的なポイントを伝える。4つ目は自分で行くのは嫌らしいから、できるようになっている友達に指導させる。5つ目は全員集めて指導する。これぐらいの選択肢は出てくると思う。どれを採るかは、そのときの条件によって違う。このときに必ずどれを採れとは言えなくて、ここで与えられている条件によっても、当然違うことが起こるわけです。実際に授業のときに、例えばこれは高校の授業ですが、これだけの道具をこれだけの生徒さんにセッティングさせようとするのと何分かかりますか。50分の授業で、これを出して全部片付ける。これで20分も使われるとちょっと辛いです。普通、小学校の先生方だったら3分以内くらいでどうしてセッティングできるかを考えられるところだと思う。逆に言うと、そのアイデアがない人はこのセッティングは使えないということになる。それから、こういうケースです。中学校の2年生なんですが、かたまっていてやらない。ずっとこの態勢のまま。周りの子はやっているのに。ここの場面、一回も先生は行かなかったんです。こういう子が出た場合、どう対処しますかっていう問題出てきます。それから、これは小学校1年生の子どもさんのペアの様子ですが、友達ができたら手をたたいてあげるケース。でも、こういう行動は放っておいて出てくるかという、あまり出てこない可能性がある。先ほどお話ししたように、子どもさんたちは日常生活で自分たちが持っている人間関係のルールを授業に持ち込んでくる。そうすると、友達ができたときに拍手してあげることが当たり前じゃない子どもさんは誉めない。多分できていても知らん顔をしているケースはあります。でも、体育の授業のときは、こうしようと言うと、子どもたちはし出すんです。逆に、このレベルのことを子どもたちにちゃんと指導しているかどうかで、この子たちの関係って全然違う。自分がうまくいったら友達が喜んでくれる、ということが経験できている子と経験していない子って、その後の人に対する対応の仕方がころっと変わるはずなんです。こういうレベルの中で、私たちが気をつけないといけないのは、もう一度先生方の価値観のところへ戻りますが、授業のところで成果が出てくる先生と成果が出てこない先生たちの一つの資料として、こういうものがある。意図的教育観と成功的教育観って言います。これ（意図的教育観）は、自分が教えようと努力していればそれでOKと考えられる人。下の方（成功的教育観）は、自分のやったことが成功しているかどうかということを重視する人。上（意図的教育観）のタイプの方は、結果が出て来ようと出て来まいと俺はやったんだからそれでいいって流れる。下（成功的教育観）のタイプの方は、結果が出て来ないと何かまずかったんじゃないかと考え始めることができる人。これは、授業で成果を残していける人になるかどうかを分けていくと思う。実際に今言ったことができるようになるうとすると、いろんな知識を先生方が身につけていかないとダメという話になる。いろんな役に立つ知識を教えてもらう。それは覚えておけよって言われたらそのレベルで覚えてもらう。それは、どういうことなのかっていうことは自分で試さないとは分かんないですね。試しながら、そういうことは何なのかということを理解していく。3つ目は人の言ったことを試していく中で、自分なりに新しい知識を見つけていけるケースです。こういう知識を先生方が実践の中で蓄積されながら、いろんな方に伝えていかれているはずなんです。先生方が身につけられている4~5つくらいの中で、一番問われるのは児童へ指導するための知識。どんな方法で始めますか、どんな発問で始められますか。オーバーハンドパスは、どういう動きをすれ

ばいいとか、側転になったらどういう動きをすればいいのとか、生徒さんの発達段階が違うとか、どんな家庭に育ってどんな人間関係とかの知識が必要なんです。環境もあって、どんな授業でどのくらいできている、現実の授業で実態に合わせて、何をどうするか使い分けていくか。大学生レベルだとムキになっていく。それは実践の中で獲得されていった知識ですが、そこにいくまでに3段階くらいあるといわれている。入門期は、大学生または初任1年目。真中は、だいたい5年目くらいの段階で、習得の段階は10年とか。これは、知識を身につける段階から、知識を関連付ける段階になっていく。そこに行く段階で、授業での自分のあり方が良かったか悪かったか授業の方法で考えていく方。(技術的省察)それは、子どもさん達にとってどうだったかを考えられる方。(実践的省察)今は、こういうやり方だけど、時代が変わればもっとこういうやり方があるんじゃないとか。例えば、体力作りの昔ってこういうことあったよね。これは、まずいよね。と考えられる方とか。(批判的省察)省察って考えられるレベルがあります。一番単純やり方は、何が起こっていて、その原因は何で、そのための解決策は何なのか。こういうループを使って自分達の目の前で起こっていることを観察していくことが一番最初のスタートだと言われている。ふつうは、自分が授業をやると「どうしてこんなことが起こったか考えてごらん」と言いますが、そこから「次どんなことするか、解決策を出してごらんよ」と言うと、結構良いアイデアを出してくる。こういう中で、実際私たちは授業の時は、どういうことを見ていくか。例えば先生が子どもさん達と、相互作用でどういうやり取りをしているか。どういう学習環境か。子どもさん達は、意欲的に学習していたか。授業の勢い、停滞なく子どもさん達が活動しているか。効果的な学習で、ちゃんと結果が伴っているか。こうやってざっと見ていく。この中で、どこに問題があるかという、根拠を考え原因を特定していく。そして、その解決策を検討しましょうということになる。この時に私たちが考えたいのは、個人での問題か、組織や環境の問題か、区別する必要がある。例えば、こういう言い方をすると語弊があるかもしれないが、高校の先生方が良く言われるのは「中学校で何を教えてきたか」、中学校の先生方が何を言われるかと言うと、「小学校で何を教えてきたか」、小学校はまた分かれていて、高学年は「中学年は何を教えていたのか」、中学年は「低学年で何を教えてきたのか」みんなどんどん先送りさせるじゃないですか。確かにそういうことはあると思うんですけど、少なくともその担任の先生が変えていけることが何かあるはずです。でも、明らかに前の学年でこういうことを学習してきたかを知って次のステップに生かすことは難しい。今回の学習指導要領も2年単位で出されている。担任が毎年自分の思いつきでやっていくと、ある領域をとばしても誰にも伝えてないので子どもさんが何もしませんでしたといっても、誰も責任とってくれないという状態になってしまう。これは、個人では責任を引き受けられない話で、学校としてどういうカリキュラムにするかという話に必ずなる。環境の問題もある。バスケットボールのゴールが正面に並んでないところもあり、左35°から投げなくてはならず、どうするか。明らかに環境状況を個人では変えられない。それでも何とかやりましようとなる。そこを識別したうえで授業の結果が出てこないとすると、計画段階でまずかったか。計画ではなかったら、授業過程での問題か。それとも、省察がまずかったのか確認しなければならない。良いプログラムでも、使わない人は当然いる。計画はめちゃくちゃいいが細かすぎて、自分がやる時には、こんなの分からない情報が多すぎて。それは当然、検討することになる。改めて考えてみると授業の成果は、私たちの生徒さんの価値観を絶対無視できない。「動くのが面倒くさい」というお子さんがいたら、その子に「動け」と言っても体育をしない。なかなか変わることができない。でも、これを前提に先生がこの子を変えたいと思うかどうかで全然違う。変わらない、こんなもんでしょうと思ったら、そこでお終い。変えようと思う人は、動き始める。もう一つは学習する必要があると学習させようとする。ところが、どうすると学習することができるか。どうするとこの事態を変えることができるか。このノウハウを知らない人は変えられない。なんか変えたいと思うが変えようがない。変える場合の一つは、先生方が身に着けているスキルです。どういうテンポで話しかけるとか、間合いを変えるとか、これは、明らかに先生方のスキルに依存する。カリキュラムでも、何をどのくらいやるかが当然問題になるでしょうし、良い教材といわれるものを使えるかどうか関わってくる。こういうことが結果的に生徒さん

達が身につけていく学習成果につながっていく。技能だけでなく、先ほど話したように、できたら喜んであげるとか、こうしようと働きかけてあげるとか、そういう行動にも端的に表れてくるといえる。この時にもう一つ確認しておかなければならないのは、授業のところでこれだけやったら上手くいきますというのは、たぶんないです。良く言いますが、かつて授業の進め方で一斉指導が良いか？個別指導が良いか？グループ指導が良いか？こういう話があって、結果を発表されている方たちがいる。皆さんたぶん自分自身の授業を振り返ってみて、1時間中一斉指導していることはないでしょう。逆に、一斉指導をしてはいけないというとなんが困るか...授業の最初の説明ができなくなる。あり得ないです。必ず、全体に情報を与えて同じことやる時間は必要。一斉にやる時間帯もあれば、子どもが課題に応じて個別でやる時間帯もあれば、グループで動いている時間帯もある。授業の中で、おのおののシチュエーションに応じてやり方を変えているはず。逆に言うと、学習指導のオールマイティーはない。目的に応じて組み合わせる結果ができるように計画を作れるかどうかを問われる。結果がちゃんと出てくる授業というのは、学習者に応じた内容や課題が設定されているし、学習者が成功するような教材が設定されているし、学習指導の攻略も柔軟に設定されているし、学習を促すシステム...子どもさん達が見ることができると、コミュニケーションがとれる。アカウンタビリティというの、子どもさん達が学習に責任をもつように指導しているということです。動きを見たということで、例えば、小学校2年生の子に「逆上がりをどの高さでもいいから10回しておいで」と言うと、鉄棒の所に行くと2・3人が来て「できない」と言う。普通ならそこで「じゃあ、教えてあげようか」と対応するケースが多いと思う。そこでやるべきことは助けてやるのではなく、聞いてあげること。何を聞くかということ、「あなたは何をしろと言われたのですか？」「10回しろと言われました」「10回したの？」「2回です」「何で？」「10回したらおいで。それでもできなかつたら私が助けてあげる」これを最初のところで達応すると、何が起るかというと、できない子がどんどん先生の所へ来る。そうすると、回れなくなってしまう。少なくとも子どもさん達は、「これは私がやるべき課題で、私が取り組むこと。取り組んだ時に初めてサポートしてくれる。誰かがやるのではなく、自分がやることなんだ」ということを覚える自体をやらなないとだめなんです。これをアカウンタビリティシステムという言い方をします。これは、子どもさん達が自主的にしていくということ育ててあげないとまずい。普通はほったらかしにし、家庭での躰に依存しているところが多い。でも、こういうのは授業のところでちゃんと取り組んでいると褒めてあげることができるので、その子たちは、やればできるということを感じることができる。特に体育では、結果がはっきり出てしまうので、ある意味成果としては期待しやすい。

いま、ざっとお話ししたことから考えてみるとこういうことです。逆向き設定という言い方をしますが、教育実習生の学習指導案に接していると、一時間目、最初から積み上げをする。うちの学生に「50時間分の短距離走の単元計画を作れ」と言うと3タイプぐらいに分かれる。一番真面目な子は、1時間ずつ書いていく。そうすると、10時間ぐらいでへたる。教えることがないと。賢い子は、1時間目と50時間目を先に書く。最初説明ね、ラストこれね、その間を何時間か調整していく。賢いやり方は、ゴールなんですね。ゴールは絶対無視しちゃだめで、これは、常日頃のこと、ゴールを優先するのか、時間を優先するのか、もし子どもさん達にやらせたいのなら、どのくらい時間がかかるのかを考える。時間がないのなら、ゴールを変えるしかない。何を結果として期待するのですか、それに応じてどのくらいのことのできるのかを確認するための証拠を集めなければならない。それがなくとくる。この二つを決めて自分のやろうとすることをやって下さい。指導と評価の一体化というところと言うと、結果だけ出したのではなく、結果が得られているかを確認する手続きも一緒にセッティングする。そこをやっていかないと、どこまでやったか分からなくなる。この時に、内容スタンダードとパフォーマンススタンダードと言いますが、何ができるようになれば良いですかと言うと、評価されるだけではなく、子どもさん達がどれだけできましたかということ。例えば、跳び箱の授業でいうと、「先生が期待していたところに行ってきた子が20人ぐらいいました」とか「クラスで8割ぐらいいました」とか言ったとします。この8割が高いか低いかは、その時の評価・物差しで全然変わる。実態の把握というのは、ア

セメントと言いますが、何割ぐらいの子どもさんができましたか？何割ぐらいのお子さんができませんでした、が実態です。それをエヴァリュエーション、査定するという。それが良いか悪いかもって価値判断を入れなければならない。当然、単元の始まりではできなくて当たり前なので、8時間単元で7時間になってもできていないとすると、それはちょっとない、まずいでしょ。同じ単元でも査定が変わってしまう。こういう目で見ていくと、いろんなことが見えてくる。皆さん授業をやられるときに、こういくことに出合われると思うんですが、授業でどんな問題が発生するか予想させる。そうすると、そのことが起こらないよう予防的な手続きを必ずとるはず。ところが、一方的にマネジメントするとうとううまくいかない到達しないという時は、その場で対応を決めるしかない。それがだんだんできると、先生がその場でごちゃごちゃ言わなくても子どもたちが勝手に行動できてくる。こういうプロセスで、授業で何をどうしつらえるかが決まってくる。先生が初任の人と、5年の人、10年の人と言いましたが、その経験によって、使い方が分かる人と分からない人に分かれる。分かれると何が起こるかと言うと、その人達でその段階でできるプログラムをつくり一定の成果が出るように考えることになるはず。

あと二つぐらいお話しします。これは、長野でデーターを取らせてもらったのですが「けのび」でどのくらいできれば合格点をあげるのか。小学生にデーターを取らせてもらった。できている、できていないを距離で測るのが一番分かりやすいが、私たちが調べているのは、どこでつまづくかということ。なので、例えば「けのび」の準備のスタートで手を組む。沈み込みは、頭の頂点が水中に沈み込んでからかく。浮いているところだと、手が頭の上で肘が曲がらずに合せているか、頭は顎を引いているか、腰がくの字になっていないか、足は上下ばらついていないか。こういう観点で子どもさん達の動きと距離を評価してあげると、特定のパターンが見えてくる。正しい動作ができないと、けのびの距離を伸ばすのは難しいと分かる。どの年齢層でどんなことができるか、沈み込みの動作はほとんどができない。沈み込みの動作は、たぶん指導していない。だから、子どもさん達はやらないからここ××なんです。でも、最初からできてしまうところもある。学年によって突破できますかという話になると、3年生になるとこのくらい、4年生になるとこのくらいという指導が見える。けのびで考えてあげると、子どもさんたちには3年生くらいでちゃんと指導して、4年生くらいでできるようにしていけないといけない。こういうことは、ちょっとしたデーターの集め方でも見えてくる。僕たちは、距離自体を重視しようというのではなくて、なぜこの結果が出てくるかという事を動作の部分にもどって見てみる。みんなこういうエラーをおこしているんだ、ほとんどがエラーしているとしたら、それをどの段階で教えるかということになる。ほっといて学習できるものであれば、皆同じエラーは起こさない。逆に言うと、ぐちゃぐちゃ言わなくても通過していくものは、先生方わざわざ時間かけて教える必要はない。そういうような重み付けて言うことをしていけないと、皆同じ時間かけるので時間が足らなくなってしまう。こういう話をしながらお伝えしたかったのは、来年に向けてみなさん、これから取り組みをしていただくと思うんですが、授業の中で皆さんが同じ目で見ると、「ここはエラーだな」と見えてくるものがあるとか、「これはそんな時間かけなくてもいいよ」とか「これくらいかかるよね」「これくらいじゃできないよね」そういうことが出てくる。尚且つ、それは先生方が使いこなせるものに仕立て上げていけると、子どもさん達はその授業で結果を出して行くのは難しい。そういう意味では、「最低これは外すなよ」「最低ここはやってね」という事自体を確認しておく必要がある。そこを見る目がお互いに協力されていると、どこの学校に行ってもそれなり結果が出る授業ができる。公教育は、子どもさんはどこに行くか分からない。どこに行っても同じ質の教育を受けることができるのが、公教育の大事なところ。そういうところに持っていこうとすると、先生方に紹介したのが若干の例です。先生方の方が子どもさんを見られて情報がたくさんあるので、横・縦糸をからませて教育していただく。それが、この大会をしていただいてみなさんの大きな財産になる。私たちのできる支援をさせていただきたいと思います。